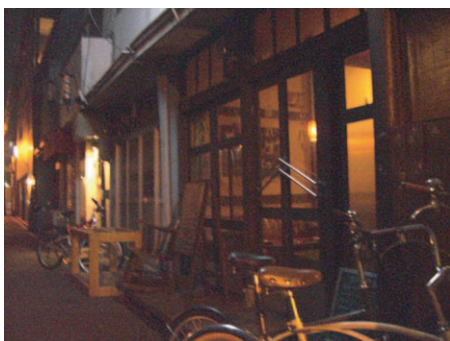


誰かの場所へおじゃますること



民家を改装したカフェ

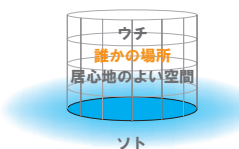
僕らのまちでは「居心地の良い空間」は貴重な存在になりつつある。実際、都会の中では「居心地の良さ」を売りにした場所がいくつか出現し密かな人気を呼んでいる。例えば路地裏にあって民家に少し手を加えたようなカフェがそうだ。店内はいわゆる洗練されたお洒落な空間ではないかもしれないが、そこはよく知っている人の食卓へ招かれたようなアットホームな雰囲気がある。このようなカフェを訪れた時の「誰かの場所へおじゃまする感覚」は、僕らに「居心地の良さ」を感じさせてくれる。そしてそれは、僕らが家島を訪れた時の感覚とよく似ている。「家のような島」である家島は、ちょうど都会の中にある隠れ家的なカフェのように、関西における隠れ家的な島になり得るのではないだろうか。神戸や大阪、京都など関西圏の都会から「少し足を伸ばせば」たどり着くことができる家島は「たびたびおじゃましたくなる島」としての可能性を秘めていると思う。



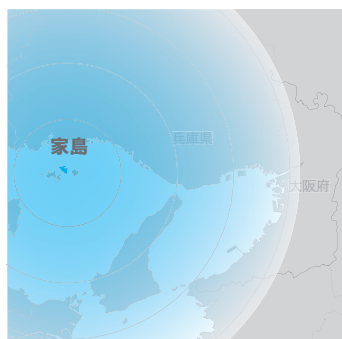
カフェの内部



おじゃましたくなるカフェ



同じウチ・ソトの関係



おじゃましたくなる島

家島は「外」型の観光にすべきではない

「探られる島」プロジェクト2005は、平成17年の秋に家島本島での2泊3日のフィールドワークと大阪での4日間の会議を合わせた計7日間のワークショップの企画である。全国から集まったメンバーは、建築・土木・都市計画・ランドスケープ・経済・アパレル・語学・写真・生物工学など、様々な専門を持つ学生や社会人。僕らはそれぞれ自分の専門や興味に沿って家島を歩きまわった。また、まちづくりやフィールドワーク、編集の専門家のアドバイスを受けながらメンバー全員で一つのコンセプトに沿って議論し、冊子にまとめた。それがこの「探られる島」プロジェクトブック01だ。プロジェクトの中では「今後の家島」についてもみんなで話し合った。家島には「わかりやすい観光資源」はないのかもしれない。でも今回僕らが家島を訪れて魅力を感じたことは、何ともいえない「居心地の良さ」である。家島の「日常の風景」にちょっとした驚きや感動があり、家島の人たちの「普段着」のもてなしが僕らにとっては新鮮だった。だから家島はありきたりの「外」型の観光を目指すべきではない、と僕らは考えている。訪れた人が「またおじゃましたくなる」感覚をこれからも大切にしていってほしいと思う。僕らが今回の2泊3日のフィールドワークの結果から議論・考察した内容はいしまの一面を捉えているに過ぎないのかもしれない。いしまにはまだまだ隠された魅力があるはずだ。だからこれからも僕らは新しい仲間を連れて、たびたびいしまを探りにおじゃましたいと思う。



プロジェクトの仲間たちといえしまを探りに向かった



島の人との交流の中から家島の魅力を探った



夜を徹して「今後の家島」について話し合った